

社会福祉の礎を築きました。また、原爆で破壊された浦上天主堂は、1880年に浦上山里村庄屋敷を買入れ、1895年煉瓦造りロマネスク式大聖堂の建設に着手、20年後の1914年完成しました。被爆当時、2人の神父と数十人の信者が下敷きとなり、浦上信徒役12,000の内8,500人が犠牲となったといわれます。(参考：『長崎県百科事典』)(写真は、「浦上天主堂」)

●原爆は、日本人のみならず多数の韓国・朝鮮人、中国人をも犠牲にしました。爆心地公園の一角に、「追悼長崎原爆朝鮮人犠牲者」と刻まれた石碑が建っています。裏側には、「強制連行及び徴用で重労働に従事中爆死した朝鮮人とその家族のために」とあります。正確には調査されていませんが、当時1万数千人の韓国・朝鮮人が被爆し、犠牲者は数千人、1万人との説もあります。また、現在の平和公園には被爆当時長崎刑務所浦上支所があり、収容者81人全員が犠牲に、この中に少なくとも46人の中国・朝鮮人がいたとされています。(写真は、「原爆朝鮮人犠牲者追悼の碑」)



●幕府時代、この山里村には、「皮屋町」という被差別部落が存在しました。皮屋町は、江戸時代初頭、現在の寺町辺りにあり、西坂(1648年)、そして浦上(1718年)に移転させられました。彼らは、幕府直轄領の「えた」身分として、職務である皮の製造、製品化の仕事に従事していました。江戸時代初期、長崎には、鹿皮や牛皮などの大量の皮革類が輸入されていました。その商取引や加工のために彼らは活躍しました。また、今で言う警察的な仕事に従事していました。ちょうど長崎と浦上の中間に位置した皮屋町は、市中に不審な人が出入しないか監視と見回りに当たりました。「浦上四番崩れ」では、キリシタン捕縛の任に当り、そのため、明治以降以降憎しみと差別が上塗りされま



した。しかし、彼らもまた、明治4(1871)年の「解放令」以降、旧「えた」身分に強制された差別を撤廃するために奮闘しました。当時のお金で4,000円という巨費を投じて、中馬込小学校という地域の学校を建設し、子どもたちの教育に力を入れていきます。また、明治の中期には青年会館が建設され、部落改善運動が行われました。また、1928年には長崎水平社も結成され、差別撤廃のため尽力しています。写真の「涙痕の碑」は、原爆後移転を余儀なくされた旧浦上町出身者たちが、原爆犠牲者を追悼するために建てた碑です。(写真は、「涙痕の碑」)



フィールドワークの ご案内

「長崎を考える」企画として、

Aコース 長崎の部落史を歩く

Bコース 原爆・部落・キリシタン

の2コースのフィールドワークを、研究所の事業の一つとして位置づけることになりました。

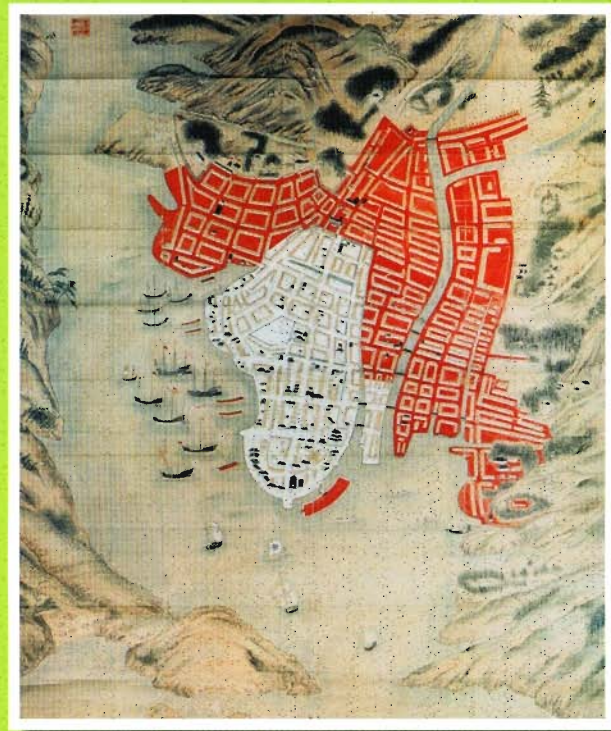
団体・個人等で参加ご希望の方は、下記の研究所事務局までお申し出下さい。日程・人数・コースの選択、参加費等々ご相談に応じます。

〒850-0048 長崎市上銭座町2-7
TEL 095-847-8690・FAX 095-847-8696

表紙写真は「寛永長崎港図」(長崎市立博物館蔵)

NAGASAKI

じんけん 歴史散歩



NPO法人 長崎人権研究所

<http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/>

Aコース

長崎の部落史を歩く



- ねらい 長崎の部落が移転する跡をたどり、人々の生活や、歴史的な意味、その役割に思いをめぐらす。
- コース 崇福寺⇒大音寺・皓台寺⇒眼鏡橋⇒長崎市役所⇒長崎会所跡⇒筑後町通り⇒26聖人殉教地⇒時津街道⇒浦上青年会館跡地⇒涙痕の碑
- 所要時間 約3時間

●長崎の繁華街浜町から山沿いの寺町には、浄土宗大音寺・曹洞宗皓台寺というお寺があります。この坂は、両寺の間を通る坂道で、弊振坂といひます。その昔、



長崎の領主長崎氏がこの場所で、弊(ぬさ)を振って戦をしたとのことでこの名前が付けられたといひます。江戸時代初頭、ここには、皮屋町という履物を作る職人が住む町がありました。下の中島川に下っていくと、毛皮屋町という鹿皮を扱う町もありました。当時、長崎には、朱印船商人やスペイン・ポルトガル、中国の船が頻繁に出入していました。彼らは中国や東南アジアで絹や砂糖、薬種などを廉価に仕入れ日本に運んできました。また、鹿や牛、鯨などの皮革類も大量に輸入されていました。皮屋町や毛皮屋町は、輸入された皮革を加工・製品化し、また、多くは大坂へと送られる仲買もしていました。1648年、両寺は奉行に増地願いを出し認められ、皮屋町は、現在の西坂の地へ移り住むようになりました。(写真は、「弊振(へいふり)坂」)

●筑後町通りを歩くと、本蓮寺というお寺があります。正面入口には、「サン・ラザロ病院 サン・ジョアン・パウチスタ教会」と刻まれた石碑が建っています。ラザロとはハンセン病のことで、キリシタン時代、宣教師たちは孤児の救済や福祉活動に従事し、病院や施設



を作ります。長崎・平戸・五島・豊後・山口・大坂・京都・江戸など全国各地にハンセン病患者(重い皮膚病を含む)を手当する病院を作りました。長崎には二ヶ所あったとされています。(写真は、「本蓮寺」正面入口)

●皮屋町が移転した地の港に面した側に、26聖人殉教地があります。背後には記念館が建っています。1597年、京・大坂で捕らえられた宣教師たちは一ヵ月かけて長崎に送られ、この地で処刑されました。当時、長崎はキリシタンの町であり、その後、元和の大殉教と称される弾圧を経て、この地で600名余りのキリスト教徒が処刑されます。1862年、この26名は時の教皇ピオ九世に列福されて聖人とされました。この地にあった皮屋町は、1718年再度浦上は馬込に移転していきます。町民は、幕府直轄領の「えた」身分として皮の製造・皮革製品の製作、今でいう警察的な仕事などに従事していました。時津街道から長崎入りする人は、必ずここを通っていかなければなりません。その意味で、この場所は長崎の治安を保つために適した場所だったのです。(写真は、「26聖人殉教地」)



●明治4年のいわゆる「解放令」の後、皮屋町という町名はなくなり、この地一帯は馬込と呼ばれていました。旧皮屋町民は身分が撤廃されたことで、まず子どもたちの教育に力を入れます。当時のお金で4000円(現6000万~1億)という巨費を投じ、中馬込小学校を建てます。レンガ造りの立派な学舎だったと、当時の教育資料は伝えます。またこの小学校は、新聞にも旧皮屋町住民の奮闘として取上げられています。明治30年代になると、部落に貧困化が襲い、また、周辺住民の差別が強くなっていきます。住民は、生活を守り差別をなくしていくために部落改善運動を起こします。中央の胸像は、その中心的な役割を果たした人を称えて建立されました。(写真は、「浦上青年会館跡地」)



Bコース

原爆・部落・キリシタン



- ねらい 長崎原爆の足跡を踏みしめ、当時の惨状を通して核爆発の恐ろしさを知り、同時に原爆・宗教・差別の問題を考える。
- コース 浦上天主堂⇒如己堂(永井隆記念館)⇒平和公園⇒原爆中心地公園⇒時津街道⇒一本柱鳥居⇒坂本町国際墓地⇒浦上町原爆犠牲者慰霊の塔⇒長崎平和資料館⇒26聖人記念館
- 所要時間 約3時間

●長崎市の北部一帯を、今でも浦上と呼びます。幕府時代、長崎は四つの地域に分かれ、浦上川をはさんで西側を浦上淵村、現在の長崎駅から北東部を浦上山里村、港部を長崎、現在の伊良林・鳴滝方面を長崎村と呼んでいました。コースは、浦上山里村に当たります。1945年8月の原爆投下は松山町でした。浦上(山里・淵村)の真中です。長崎原爆とされますが、より理解するためには浦上原爆と呼んだ方が、原爆のもたらした様々な影響を考えることができるのかもしれませんが、ちなみに、爆心地から1k以内で45年度中に死亡した比率は、行方不明を合すると実に95.1%に上ります。(写真は、「原爆落下中心碑」)



●ご存知のように、幕府時代、浦上には「潜伏キリシタン」と称される人々が住んでいました。彼らは、明治初年「浦上四番崩れ」という事件により「旅」と称される流罪を経験しました。浦上に住む約3,400人の人々は、明治6(1873)年にキリシタン禁制の高札が撤去されるまで、西日本各地の藩(県)に預けられ、「旅」先では600人余りの人が亡くなりました。帰郷後も台風被害や赤痢・天然痘が流行し、重ねて苦難を味わうこととなります。岡山に流されていた岩永マキは、フランス人宣教師ド口神父を助け救護活動に当たり、孤児救済のため「浦上十字会」を組織し、

